私の足跡を省みて

〜故 金子直吉翁にお目にかかった印象〜

酒井 温

大正五年以来、私は台湾の鈴木の製糖会社から神鋼へ転籍入社し、設計部に勤務していたのですが、ある時常務の田宮さんに呼び出され「本店の金子さんから技師に相談したいことがあるから寄こしてくれ、と電話があったから君行って来い」との命令を受けたので、何んの相談か全く判らず不安な気持ちで直ぐに本店に出向いたところ、別室で暫らく待たされて金子さんの余り広くない簡素な部屋へ案内され、中央に置かれた机の向う側の正面に古びた帽子を覆った儘で姿勢正しく腰かけて当方を向いておられるので一礼をして腰をかけると、相談ではなく独りでお話を続けられ、漸くお話が終わったので一寸質問をしたのですが、それには何んのお答もなく只一言「頼んだ」とのことであったので、帰社して田宮さんに報告して直ちに研究調査に取りかかったのですが、金子さんのお話の要旨は「君は台湾で甘蔗（砂糖きび）を絞って砂糖を製造した経験があるのだから、其方式で樺太のツンドラを北海道へ持ってきて、ある事業の原料に使うのだが九割近くが水分であるから、樺太で其水分を絞って持って来るようにして貰いたいので、先ずその研究調査と実験をやってみてくれ」とのお話であったので早速とりかかりますので研究試料のツンドラを樺太から取り寄せて頂くことをお願いして辞した次第です。

神鋼では、私が台湾での経験で実物の四分の一ぐらいの甘蔗圧搾装置を設計し、急工事で製作して樺太から送られてきたツンドラを早速圧搾してみたのですが、予想に反し一般の含有水分とは違い、この水分の搾出は容易でないことを感受したので、阪大の微生物研究所に持込み専門教授の協力を願い、顕微鏡試験その他の共同研究をしたのですが、ツンドラの水分は機械的では経済的に搾出かつ乾燥することは不可能に近いとの結論に達し、当時は失敗に終わったのです。そこで金子さんへの報告書は今は失なって無いのですが私の記憶では、前記の通り失敗でしたが、他事業の工場より出る廃気ガスの余熱を利用して乾燥することを進言したのです。しかしその後、京大で電熱乾燥で成功したようですが、これも経済的には不成功であったと思います。

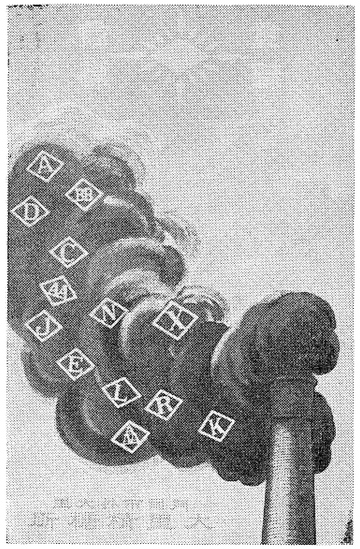
その後また田宮さんを通してお呼出しを受けたので本店に行き、前と同じ部屋でお目にかかったところ「台湾で甘蔗を圧搾した糖汁から砂糖を製造した経験があるのだから其方式で海水から塩をとることを研究して貰いたい」とのお申付けであったのでお引受けして帰社し、田宮さんに伝え考えた結果、塩は専売であるから上京して専売局に行き、塩の最高権威者であった勅任技師の田中新吾さんを訪ね、お教えを願ったところ三田尻に研究所とモデル工場があるからと言われ、久保田研究所長へご紹介を得たうえに、台湾での親友であった故原田三左衛門さんと同窓であったので、特に便宜を与えられ大いに勉強したのですが、当時は未だ工業的には算盤がとれない段階であったので、金子さんへの報告書には、やはりツンドラの場合と同様に、鈴木は種々の事業を開発されているのですから他工場で使った燃料の余熱を利用して、先ず海水を濃縮し、而して製糖方式で製塩することを進言したのですが、天津か新義州で事業化すると言うことで其の方の専門家へ移されたようであります。

ツンドラの乾燥と海水の濃縮に対する何れも他力本願のような報告で、金子さんのご期待には反したと思いますが、当時は大不況時代で実験にも経費を要したので、神鋼として今一段のご協力ができなかったことを残念に思います。この二件で数回お目にかかる光栄に浴したのですが、今に残る印象としては若輩の私に対するお話振りや態度が慈味に溢れ、その中に鋭さを感じたことで、そのご夜行で上京の列車中の三等車で、故安東秘書と向い合って腰かけておられるのにお目にかかったのが最後で、今も目の辺りに面影が浮び、只々頭が下がるのみと申すのが私の印象であります。金子さんがツンドラの乾燥や海水よりの直接製塩に、製糖方式採用に関心を指示され、私がその調査研究に当たった顛末は前記した通りですが、この機会に未だ余り伝えられていないようですから、私の携わった台湾の鈴木商店の製糖事業について簡潔に述べさせて頂きます。

日本の三盆白砂糖は、平賀源内が長崎で蘭学を学び、生地の讃岐藩に伝え、ここで製造したのが最初で、製糖の祖と伝えられていますが、工業的な製糖事業は北海道の伊達紋別で、明治十三年に仏独より技師を招聘して設備を輸入し、士族の生活のために甜菜糖（砂糖大根を原料とする）の製造を開始したのが嚆矢であるが、これが失敗に終わったので製糖事業の先覚者と言われる鈴木藤三郎さんが、明治三十三年に台湾製糖会社を創立し、伊達紋別の設備を台湾南部の高雄港に近い橋仔頭に移し改装して据付け、甘蔗を原料として製糖を開始したのが明治三十五年で、これが台湾糖業の分蜜糖工場の嚆矢であります。

明治三十六年に鈴木商店が九州大里に建設した大里製糖所は、現在日本国内に数十カ所もある精製糖工場、即ちシュガーリファイナリーで玖瑪、瓜哇、その他海外から安い原料糖を輸入し、精製漂白し鈴木は◎の商標で売り出したのであるが、当時製糖の神様と言われた斉藤定雄さんの指導によったので、品位が優秀であるとして忽ちセンセーションを巻き起こし、既製の他社商品を圧倒したのであった。

実に数十年前のその時代に、鈴木商店として九州大里に今にも残るシュガーリファナリーを建設し、しかも製品が他を圧倒したということは、金子翁の慧眼と大胆さと実行力に今更ながら改めて感嘆申上べきであります。



「大里製糖」の宣伝はがき

そこで大日本製精会社は、会社の年史にも明記してある通り、大里製糖所の買収を決意して鈴木商店へ積極的に申入れてきたので明治四十二年、金六百五十万円で譲渡し、当時代の多額な資金が鈴木の諸事業に役立ったことは申すまでもなく、製糖事業は一旦中止されたのです。

然るにそれから間もなく台湾総督府の民生長官であった後藤新平伯が金子総支配人へ、鈴木を信頼し且つ期待して台湾の糖業の開発と発展に協力せよ、との強い要望があったので直ちに受諾し、明治四十三年に北港製糖会社を創立して、当時神鋼の技師長であった辻湊さんを指名し、南方の糖業諸国を視察せしめ、欧州諸国へ派遣して調査の結果、英国とドイツへ甘蔗の圧搾能力が一昼夜一千トンと一千五百トンの原料糖の製糖工場、即ちシュガープラント二つを買付け、製作完成した諸機械および建築諸材料をドイツ船カッサラ号をチャーターして満載し台湾の高雄港に運び、港口が狭いので満潮を待って漸く入港させたという一幕もあった。

この二つのプラントは英独へ別々に註文したのではなく、機械ごとに両国の定評のあるメーカーを物色して分註し、これをアッセンブルした当時、経験日浅かった辻湊さんの頭脳的技術力には敬服のほかなく、台湾で一般に模範工場と定評があったことが、これを証明した次第です。この一つは台湾中部の台中市に近い月眉庄に、他の一つは南部の嘉義市から十二マイルの北、港溪の下流に接して建設されることになり、そのために明治四十三年十二月九日に、私は辻湊さんの助手として神戸港から郵船の備後丸で二人で初めて台湾に渡ったのですが、出発に当たって辻さんに連れられて神鋼の田宮さんを紹介され、本店では幹部の数氏に紹介されたのですが、金子さんのお託宜として次のお指図を受けたのです。

「いま日本では横須賀や呉の上廠で一万トンもの戦闘艦も、長崎の三菱造船では立派な客船までできており、陸上では急行列車が走っているのに、今度英独から買入れた実に高価な製糖機械のようなものが日本でできないのは不審であり納得できない。今後は化学工業が開発され、発展して行くのであるから製糖工場等は神鋼で引受けるべきである。その心構えで十分調査研究しながら建設し、砂糖の製造までできるよう勉強してきて貰いたい」とのことであった。

二つの工場の建設工事の総監督は

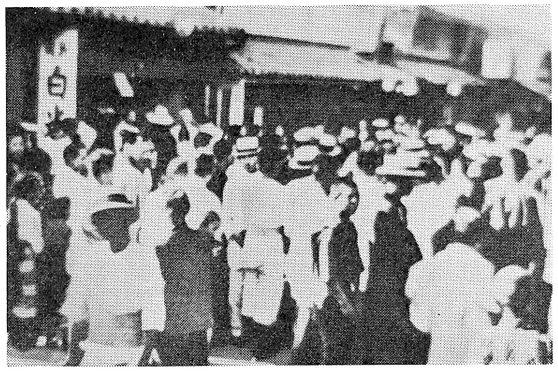
本店工事部の土屋新兵衛さんで、月眉工場を先に、次いで北港工場を建設されたが、その時代は台湾各地に製糖工場が建設され、技術者も内地からたくさん入り込んでいたので現地採用し、また工場完成後の製造技術者は布哇での二十年の経験者と、大里製糖所の化学面の経験者諸氏を動員したので、すべて極めて順調に進展し、綜合的に模範工場との定評を得たので既成の各製糖工場から続々見学者が来観したので、これも鈴木の誇りであった。

ここに特記したいことは、英独から輸入した二つのプラントの建設に当たって、これに必要なる説明書、仕様書、送り状、組立用のみの諸図面等、懇切なる諸資料に頼ったのみで、英独から一人の技師も来らず立派に完成したことは、当方の技術水準もさることながら各メーカーの懇切なる技術的サービスに全く感心した次第で、いま大いにプラント輸出に努力中の日本の各メーカーのサービス振りに今でも学ぶべきで、今後欧米メーカーに対抗してますますプラント輸出を盛んにするため緊要と考える。その後に北港製糖は東洋、斗六の二社を合併し東洋製糖会社と改称し、五工場を持つ年産約二十万トンの原料糖と耕地白糖を製造するに至ったことは、鈴木の台湾における製糖事業の最盛時代で、昭和二年四月に欧米見学の帰途に、布哇三島の製糖工場を見学しホノルルよりサイベリヤ丸に乗船し帰朝せんとする日に、鈴木商店の閉鎖を知り大ショックに打たれたことを感慨深く今も時に想起する次第です。

台湾糖業の最盛期には年産約一四〇万トンであったが、昭和二十八年に中華民国になって初めて渡台し、台湾糖業公司の楊総径理に伺ったのですが、人口が日本時代の三倍以上になったので、中北部の製糖工場は閉鎖し甘蔗の植付けをやめて米作を督励、砂糖の減産に苦慮しているとのことで日本時代の半量とのことでした。しかし技術的には米国の顧問団の指導を受けていたので、近代化は甘蔗の品種改良に、農耕地は機械化に向い、工場諸機械は新旧入替え中で、製造技術者も布哇での経験者が指導し着々進められていた。

私は大正五年に六年間勤めた東洋製糖から神鋼へ転籍入社し、最初渡台に当たって本店から指示を受けた通り、製糖プラントの国産化に尽してきたのですが、これのみに専心するわけには行かず種々の産業機械の国産化に忙殺されたが、神鋼が製糖機械のメーカーとしての初商売は、大正六年に大倉財閥関係の新高製糖の台中市近くの彰化工場増設用の能力一千トンの甘蔗圧搾装置、即ちケーンミルプラント一揃えを当時の金十万円で受註したのに始まる。以後は鈴木直系の東洋製糖に、次いでは大日本、明治、塩水港、南洋興発その他諸会社より殆んど神鋼指名で受註し、台湾と当時の南洋委任諸島へ、而して大戦後はビルマ国、琉球諸島、鹿児島県大島方面へ大中小の数十プラントを供給し、今後は全製糖プラントを海外広く輸出に努力中で、最近はフィリピン、マレーシアおよび南米方面との商談が具体化しつつある次第です。その間、大正十五年より約一カ年間、私は神鋼より欧米見学出張中にハワイでは甘蔗糖工場を、而して定評ある欧米の製糖諸機械のメーカーを見学したのですが、大戦後、昭和二十九年に日本より買入れたいと言う親日のアルゼンチンへ能力五千トンのプラント、その他既成プラントの増設に対する受註交渉に出張し、十数のツクマン地方の諸プラントを歴訪し具体化したのですが、政変のためお流れとなったことは残念至極でした。しかしその際、ブラジルと北米ルイジアナの糖業地を視察することができて幸いでした。

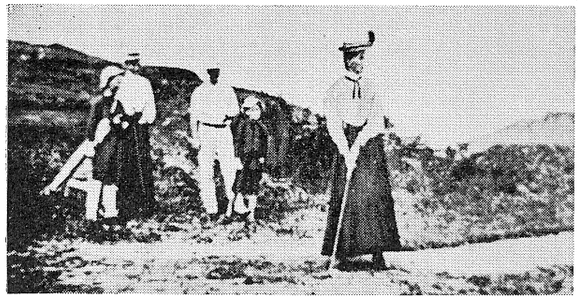
最後に台湾の鈴木の製糖工場の建設当時は、鈴木商店台北支店も他の商社を圧倒し、支店長であった平高寅太郎さんの構想で、高雄港に台湾鉄工所を創立し、神鋼も参加したのですが、今は台湾機械公司として発展しており、昭和二年の閉鎖以後、台湾における東洋製糖の五製糖工場とともに置土産になったことは感慨に堪えない次第です。



大正七年米騒動直後の群衆（センター提供）

ゴルフ

高畑誠一



日本最初の六甲ゴルフ場風景（神戸市資料）

ゴルフをはじめたのは一九一二年（大正元年）ロンドンでだが、当時は六甲にゴルフ場があってもプレーをする人は外国人だった。その頃、一緒にコースを回った連中は殆んど亡くなって、現在では私などが一番古いゴルファーだろう。今年で八十歳ともなると話題は尽きないが、六十一歳の還暦祝いに友人たちが盛大なコンペを催してくれたときは、八十歳まで生きてゴルフをやろうと堅い決意をしたものだった。しかし、その期間もアッという間に過ぎると米寿の祝いまでと欲が出る。七十五歳までは六千四百から九百ヤードある広大な広野ゴルフクラブを2ラウンド回り、それでも足りないでスタート前やプレー後に一時間の練習をする元気があった。最近は血圧が高く肝臓が悪いので、医者からゴルフを禁止されたが、調子のいいときは一カ月に一回コースへ出かけ、この夏は別荘のある六甲で毎日練習場へ行った。歳をとると、からだが堅くなって、ドライバーを打つにも左肩が回らないようになり、第一打もドライバーにかえて、ブラッシーやスプーンを使っているが、最近のアベレージはハーフ55（ハンディ15）という情けなさだ。小さなアプローチやパットで点をかせぐよりないという状態で、ロングホールでは4オン1パットか2パットをねらうことにしている。4オン3パットではダブルボギーになるから、できるだけブラッシーで真っ直ぐ持って行って……

と計算はするが、理屈どおりにはなかなかいかない。

私が一番好調だったのは四十二、三歳の頃（ハンディ3だった）で、ドライバーは二百四十、五十ヤード飛び、茨木のミドルホールで大打がグリーンの端に乗ることもしばしばだった。当時は波に乗って、関西アマチュア・チャンピオンを三回取った。ゴルフのことを思うと、さまざまなことが昨日のことのように鮮明によみがえってくるが、私の人生において、ゴルフが体力的にも精神的にも非常にプラスだった。ゴルフこそ私の恩人だと感謝しているが、早く全快してコースへ毎日でも出かけてみたい。

金子直吉

柳田義一

「米をよこせ、買占めた米を残らず出せ！」暴徒は暴徒を呼び、大群衆となって市中の米屋を襲い、久しぶりの白く光る米を強奪した。報せにかけつけた少数の警察官も手がつけられない。荒れ狂った群衆は次に米を大量に買占めたとうわさされる東川崎町の鈴木商店に向って押しかけた。金子はそのとき上京中、留守店の柳田や西川は、にわかに変わって行った街の動きをみて、生命の危機を感じとり、社員を動員して重要書類を始末して避難する緊急処置をとった。近づく群衆の声と同時に、店の表戸はたたきやぶられ、石油カンを持った二、三の暴徒の手によって火をつけられた。

「やったぞ！焼き払ってしまえ」悪鬼の声は響きわたり、真っ赤な焔は音をたてて、みるみるうちに鈴木の店をなめまわった。消防の手も及ばないほどの勢いで火は大空を焦がし、数分のうちに鈴木商店は灰と化した。大正七年八月十二日、アッと